

2月



園だより



平成30年1月26日

佛教大学附属幼稚園

「ぬくもりというご馳走」



園長 藤堂俊英

生きていることの証である口から出る息は普段は目に見えませんが、寒さの中ではぬくもりを伴い目に見えるようになります。それは北海道の雪原に生息する丹頂でも、下北半島で放牧されている短足胴長、しかし厳しい寒さにも耐えるたくましい体格の寒立馬でも、もちろん私たちでも、見事とっていい美しい白さです。寒さも底をつくと言われるこの時期になると、いろんな世代の人に「冬の楽しみは何かありますか?」と尋ねます。スポーツ派からはスキーやスケート、グルメ派からは焼きイモや屋台のラーメン、お年寄りからは「なにもありません」というような答えが返ってきます。私は南国生まれのため寒さは苦手なのですが、それでも唯一冬の楽しみは、朝の光に向かって吸いこんだ息をゆっくりと吐きだし、その厳かともいえる美しさを見ることです。

もと小学校教諭の絵本作家くすのきしげのりさんに『ええとこ』という作品があります。作者のあとがきによれば、教諭時代に子どもたちと「よい子の石」というのを始めたのだそうです。まず生徒と先生が「よい子の石」と名づけたホームセンターなどで売っている白い玉砂利と、ペットボトルを用意します。そして自分が頑張った時や、よいおこないができた時には自分のペットボトルに、また友だちがよいおこないをした時や、友だちのいいところを見つけた時には友だちのペットボトルに、その「よい子の石」を入れるのです。そうしてたまった白い小石は、子どもたちが大人になっても「自分の机の上に置いてあります」というくらい大切な宝物となっているのだそうです。

絵本の主人公あいちゃんは背が低く、声も小さく、走るのも遅く、力も弱く、100点なんて一回もとったことがなく、「わたしには ええとこなんか ひとつもない」と思うのです。ある日の学校の帰り道、友だちのともちゃんに「わたしって、ええとこひとつもないなあ?」と尋ねます。ともちゃんは「そんなことないよ!」と言ってくれたのですが、すぐに言葉にできず、「あしたまでにかんがえてくるわ」と答えます。やっぱり私にはええとこなどひとつもないんやと涙を流した次の日、ともちゃんは「あいちゃんの手はクラスでいちばんあったかい!」と教えてくれます。それを聞いたクラスの皆は代わる代わるあいちゃんの手をにぎり、「ほんまや!」「あったかーい!」と口々に言ってくれます。ところがクラス皆の手をあっためてあげたために、あいちゃんの手は冷たくなってしまいます。再び落ち込んでしまうあいちゃん。でもふと大事なことに気づくのです。手は冷たくなってしまったけれど、「あったかいきもちになった」こと、私のええとこを一生懸命に考え見つけてくれたともちゃんのやさしさのこと、そして自分も友だちのええとこを見つけてあげようという気持ちになれたこと……。

作者のくすのきさんは、この作品は子どもたちが「よい子の石」をもらった時の、花が開くような笑顔から生まれましたと振り返っています。お互いがあったかい気持ちになれること、そんなぬくもりを分かち合えること、それがどのような季節にあっても、互いの心に笑顔の花を咲かせる何よりのご馳走であることを忘れないようにしたいものです。